『おらが春』所収句全注解 (四)

黄色瑞華

凡例

一　本稿は、『おらが春』所収句（一茶二三二、他三二）の全注解である。

一　一行めに、『おらが春』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に（　）に入れて注した。

一　二行め以下に㊥として、初出及び他書に所収の有無を注した。

一　句形等に『おらが春』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。

一　語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめ、特に必要な場合は「考」として別に記した。

一　各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。

一　注釈史上主要な注は▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームで記し、以下は「川島『新釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

〈承　前〉

日々懈怠ニシテ不レ惜ニ寸陰ヲ一

けふの日も棒ふり虫よ翌も又　　一茶

㊥『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・夏、中七以下「棒ふり虫と暮にけり」。梅塵本『八番日記』文政2、中七以下「孑孑むしと暮しけり」。

注　前文、返り点、送り仮名原文のママ。「懈怠」は、なまけること。上白に「朱文公勧学文　勿謂今日不レシテ学而有ト来年一、日月逝ヌ矣、歳月不ニ我ヲ延ベ一、嗚呼老タリ、是誰ガ之愆（アヤマチソ）」とある。「棒ふり虫」は、ボウフラ。無為に過ごして、棒にふるの意に掛ける。

解　今日一日も無為に過ごしてしまった。明日もまた、の意。漢文（前文）の俳訳であるが、遊民一茶の自嘲でもある。

▼　川島『新釈』に、「一茶の生涯を通じた気持がよく出て居ると思ふ。呑気な時代だつたとは云え、一茶には定業といふものがなかつた。人馴染の悪い一茶は、俳諧師として人に取入ることも下手であつたらうし、一部の人々の如く宗匠として門戸を張るだけの世才も無論なかつた。恰度今云ふプロ文士の格で、今日は今日、明日は明日と、覚束ない気持で暮して居たのが一茶であつた。生涯安住といふものがなく、然も安住して居たやうなのが一茶であ

つた。その不安定な気持が、坐五の『翌も又』によく語られて居る」。勝峯『名句』に、「今日も一日無為に過してしまつた。孑孑同然、益にも立たぬ事をして暮した。あすも又同様であらう。あゝ年は去る。俺は年を取る――五十七歳になつてこの嘆をする一茶である」。勝峯『評釈』に、「毎日惰気に制せられて、毎日無為に過ごしてしまふ。分秒の惜しまれる一生を、あたら悔ひもなく徒食するやからである。学問に無関心な徒はあの虫を見て考へるがいゝ。腐つて淀んで汚い水に、あゝして浮沈する微生物の標本になるのは情けないではないか。赤裸になつて曲線的に乱舞するあの虫が、棒振虫の名を恥しめてはならぬかのやうに、けふも身ぐるみ棒にして、あんな風に水の中に自分を振り廻して一日を棒に振る。明日もさうである。あさつても、やのあさつても、遂に一生をいのちぐるみ棒に振つてしまふのだ。――お互ひの反省を要するのではないか。一茶の寓意は前書に対照してから解されるのである」。川島『新解』に、「棒ふり虫は汚水の中に踊りながら今日も他愛なく過してしまった、あすもそうであろう、あさっても……結局一生を棒にふってしまうのだと、訓戒めいた気持を前書にあらわしてある。もちろん開き直った訓戒ではなく、棒ふり虫を教訓の材料としているところに、逆効果的なユーモアがある」。荻原『新釈』に「一茶はこの句に『日々懈怠ニシテ寸惜ヲ惜マズ』（ママ）という前書をつけているから、自戒の気持を詠ったものである。自分は今日もこんなふうにノラリクラリしている。恐らく、明日もまたこんな風にして暮らすのだろう、そして一生を終えてしまうのだろう、このボウフリのようにという意味にとれる。一茶にしてもめずらしい殊勝なことである」「この『棒ふり虫』の句は、自分の反省というふうな、きびしい心持を持たせるよりも、そのボウフリを見て、毎日毎日同じような単調な動作をくりかえして生きている、その虫の愚かさそのもののような生態をあわれんだとする気持にした方が、俳句としての味わいは面白いとおもう。もっともこのボウフリも、いつまでも棒ふり運動をつづけているわけではなく、やがては蛹（オニボウフラ）となり、遂には、蚊となって飛び出すのであるが……」。中島『一茶集』に、「怠惰で凡庸な日々のくりかえしをぼうふりになぞらえたところに句の面白味がある」。加藤『秀句』に、「日々怠け放題で、時間を労費している自分、今日もしがない棒ふり虫だが、明日になってもやはり何になるというあてもないというのである。詞書や注記によればこうなるが、もっと心の奥にはこういう儒教的な教訓とはちがった嘆きがある。何かを待っていて、そして何も期待できない無力感である。この句から詩としての生きたものを嗅ぎとろうとすれば、そういうものしかない。この注記の部分は一茶自らその声に覆いをかけている外装に過ぎないのだと思う」。宮本『大観』に、「自分は今日も棒ふり虫のように怠惰にのらりくらり過ごした。明日になってもこんなふうに暮らし、何になるというあてもなく、結局一生を棒にふってしまうことだろうと、自戒するというより、

むしろ自嘲的な嘆きをよんでいるようである」。

無レ限レ欲ニ、有レ限レ命ニ

此風に不足いふ也夏座敷　（一茶）

㊃『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、「此風の不足いふ也夏ざしき」。

解　開けはなして広々とした青畳の夏座敷、そこに青葉の中を通ったさわやかな風が流れ込んでいる。人はそれでも、まだ不足なるものをさがす、の意。前文「無限欲」の俳訳。

▼　勝峯『名句』に、「この句は句で独立するが、一茶の作句動機はむしろ前書のそれを譬喩化する所に在つたであらう。人生限あり、飽くまで欲に執着したところで満足はされない。知足安分といふことが大切であるといふことを示唆するのが一茶の意図である。句の意味はあけ廣げた夏の座敷に、そよ〳〵と風が吹き入る。それにも拘らず、まだその風が足らぬといつて不足をいふ。勿体ないことだといふこと」。勝峯『評釈』に、「閉めても光線の透る、明り障子も今は用がないから引き払つた。風筋を妨げる襖は取外してある。野から山から来る風はどこへ、どこからでも気まゝに吹き抜けられるのだ。これだけ吹いて、これだけ吹かるれば、風も部屋構へも不平はない筈だのに、吹きたりないの、生ぬるい風だのと小言をいふ。――この人欲をたしなめるのは第三者と見ずとも、一茶の主観的な反語だとしてもよい」。川島『新解』に、「からりとした夏座敷に遠慮なく手足を伸しながら、この風の涼しさ、こころよさ、この上まだ不足があるというのか、限りある命で、欲には限りないものだと自問自答しているようでもある。故山に帰臥して後の一茶の生活感情には、可なりゆるみがあったと思われるが、前句（注、「けふの日も」）と共に、時として蘇ってくる自己反省ではなかろうか。何かにつけて小不満はあったとしても、おそまきながらも、恵まれるだけのものは恵まれていた『おらが春』時代には、反省して見れば余り不足は言えないはずであった」。

起〳〵の欲目引張る青田哉　（一茶）

㊃『八番日記』文政2・6。

注　「欲目引張る」、早朝田めぐりをする農民を指して言うのだろう。

解　早苗が根を張って、日に日に伸びゆくのをたしかめるように、起きがけに田めぐりをしている。「欲目」は作柄に対する農民の期待。「引張る」はその成育状況。

▼　勝峯『評釈』に、「青田相場で投機的な取引の行はれるので見（ママ）て、青田の良否が豊凶を予想する重大性が知られやう。朝の目覚めに早くも青田へ気を配ばる。起きぬけの顔も洗はないで青田をひと廻りして来る。神経質に大きく目を張つて、喜憂の表情が日によつて違ふ。起きたばかりで此の欲心がきざす。起きたてから

発作的な欲心に釣られて、険しい目の張りである。深刻な顔へ、朝風が一ト吹き青田を辷つて、その欲面を洗へとばかり、したゝか吹きかけるのである」。川島『新解』に、「毎朝目がさめると先ず青田の方へ目がいく、そこには重大な利害関係がかかっているので、なるほど欲目を引っぱられる訳であるが、むしろそうした打算を超えて、全生活を賭けている青田の方へ無意識に引かれる農民の気持がつかまれている。『欲目引張る』は揶揄気分であって、一茶としても意地わるく皮肉るつもりはなかったろう」。

心ニ思ふことを

古郷ハ蠅迄人をさしニけり　（一茶）

㊀『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・夏、中七「蠅すら人を」。

解　何ということだ、わが古郷では人はおろか蠅までが私をさすことだ、の意。父の遺産相続問題以降、一茶の内部に鬱積していた憎悪の念は消えることなく、生涯で最も恵まれていたこの時期でさえ、折りにつけて舌頭にほとばしる、『八番日記』翌年の九月の条にも「古郷や近よる人と切る芒」。「蠅」の種類についての詮索は無用である。

▼　勝峯『評釈』に、「冷酷な村人のあしらひを無念に、憎く、いきどうろしく、遺産争ひのむかしを今に何かにつけ、むかつ肚に据ゑかねる一茶である。『故郷やよるもさはるも茨の花』のあの刺が、深くさゝつて残る辛辣な舌に、事あるごとに毒をふくんで故郷の二字を罵るのである。蠅を敵視するのでない。こんな蠅までが、自分だけを螫さうとする雰囲気の再発生を憎むのである。一茶の『心に思ふこと』を執拗に、弟一家に繋がうとするのはよくない。それとは没交渉な『こと』があつたのだ。上納金で村人と争つたことがあるやうに――」。川島『新解』に、「長い闘争の果てに自ら帰住と決して、強引に座りこんだ一茶であったのに、あるいは、そのために、折にふれて、なお郷人に対する憎悪を爆発させている」。加藤『秀句』に、「一茶の故郷に対する気持は愛憎の綯いまぜにされた複雑なものであった。他郷で傷つき、苦しみ、悲しんだ者が迎えとられ、傷を癒やすのが故郷である。その故郷は、一茶にとっては、かつて追われたところであり、茨の刺のように傷を受けたところであった。今故郷に帰りついて、安住の地を得たはずでありながらも、苦しかった漂泊の生活を思い出すごとに、そして、期待した故郷の暖かさに触れることができない失望のたびに、『古郷』の悪意を意識せずにはいられないのだ。真夏の蠅は刺すように膚に触れる。故郷は蠅まで人を刺すのだと、憎しみをこめた詠嘆の声を洩らす。この反撥は故郷に期待するものが大きいところからこそ生まれてくるものなのだ。執念というべき一茶の被害意識の生んだ一句である」。

直き世や小銭程でも蓮の花　（一茶）

㊐　梅塵本『八番日記』文政2。

解　平穏な世、小さいながらも蓮は蓮の花をつけているよ、の意。「蓮の花」は仏のいます所・浄土の象徴である。

▼　勝峯『評釈』に、「濁り水を厭はないで咲く蓮は、浄土への夢を涼しく示現している。一茶は常に銭を以て、それも一緡九十六文から、小出しにちび〳〵と句の上に使ふ。形而上の価値にすら銭に標準を置く。蓮の中でも殊に小さい葉に、銭の型を直視することを忘れない。銭と見て、さて小さい葉なら花も小さいなりに咲く蓮に、その境に安心する他力性を認識する。大を望まないその蓮は、自力をたのまないからである。他力本願を信ずる蓮さへある。況んや人の世において直きを願はないものはない。直き世の姿は蓮の小さき花によつて象徴されてゐる」。川島『新解』に、「蓮は仏陀のいます浄土をシンボル花である。小銭は昔の通貨の円い穴あき銭のことで、小ささの極端な比喩で実感に遠いが、銭は一茶の使いたがった語である。仏くさい蓮の花に対して銭の比喩を持出したところに一茶好み、むしろ一茶臭がある。『直き世』は皮肉らしく聞えるが、小さくても蓮の花がさくからには満更見捨てた世の中でもないくらいの気持と解してよかろう」。

松陰や寝座（蓙）一ツの夏座敷　（一茶）

㊐　『おらが春』初出。

▽　『八番日記』文政2・夏、中七以下「蓙一枚のなつ座敷」。

解　松の木陰に寝蓙一枚でしつらえた夏座敷、手足をのばしてそこに憩う。そのときこそ、本来の弥太郎にかえることができたのだろう。「松陰」に徳川善政の意を含めるか。

▼　勝峯『評釈』に、「両手を組んで盆の窪にあてがひ、仰向になつて両足を伸ばす。大きな枝が青い蓋のやうに炎天をさへぎつて自然の屋根をさし掛ける。起きかへつて坐ると、大地の冷えが股の辺からしん〳〵と、曲線的にこゝろよく脳天に泌みる。退屈すれば何処へでも、くる〳〵巻いて持ち運びのできる移動座敷である。暑さ知らずの簡易生活は、ござ（莫蓙）一枚でも、その気持ちに安んずれば実践されるのである」。川島『新解』に、「野外の松かげに、ござ一枚しいて寝ころぶ気楽さ、涼しさ、松の葉ごしに青天井を望む特等席である。こういう句を見ると、幼き日に、ござの上でしたままごと遊びの郷愁をそそられる、中七は、寝蓙一つだけの、もしくは一つきりの意である」。

題（ス）童唄（ニ）

三度掻て蜻蛉とまるや夏座敷　希杖

㊐　『随斎筆紀』文政2。前書「童唄」、「三度書てとんぼ〔止〕るや夏座敷」。

注　「三度掻て」、三度輪をかいて・三度巡って、の意。

解　座敷に舞い込んだとんぼ（オニヤンマであろう）、三度ほど輪をかいて、ふわりと畳の上に降りた、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「童唄の中にどんなことを謠つてあるか知れないが、蜻蛉が夏、人家に飛び入り、戸惑ひして壁などへぶつかつて、うろたへ廻ることがある。一茶の句に『本堂を三べん廻つて行螢』とある。いろは短歌の『三遍廻つてたばこにしよ』と同じく、戸惑つて疲れた翅を三度も仕損じて、やつとものに止まる蜻蛉を、夏座敷の一興に眺めて、童唄の文句を取つて詠み入れたのであらう」。川島『新解』に、「いかなる童謡を題としたか不明であるが、幾度も輪をかいてからとまる蜻蛉の習性がとらえられている。蜻蛉の舞いこむ夏ざしきのからりとした感じも出ている」。

片息ニ成て逃入る螢かな　一茶

㊐『八番日記』文政2・6。

▽『八番日記』文政2・5、「逃て来てため息つくかはつ螢」。

注　「片息ニ成て」、息も絶え絶えに、の意。消えては光る螢火を言った。

解　息も絶え絶えに、螢が一つ家の中に飛び込んできた、の意。夜分薄暗い屋内でゆらゆらと明滅する螢火を「片息ニ成て」と詠んだ。

▼　勝峯『評釈』に、「争ふ手や団扇に揉まれて、呼吸が塞るやうに光りを消したり、やつと逃れては甦つたやうに再び光つたり、草の闇へ落ち延びる螢を擬人的に扱つたのである。『芦の葉や片息ついてとぶ螢』は芦の葉にとまつて、憩うまもなく飛ぶ螢の疲労、即ち息もたえだえに苦しい形容の片息であるが、必死になつて逃れようとして、うろたへ迷ひながらも、追手の目をくらますため、その手段に明滅する螢の知性をみとめての片息が、此の句の焦点であれば擬人化の技巧に優劣のある点でもある」。川島『新解』に、「あちらに追われ、こちらに追われ、逃げまどって切なげに明滅する螢の光を、息も絶え絶えになっていると見たのである。対象に感入した瞬間の把握である。『芦の葉や片息ついてとぶほたる』（文化五年）、これは片息という比喩の妙味を忘れかねた重作であろう。景観はよく出ているが、感じはグッと弱くなっている」。

夕皃（ゆふがほ）の花で涕（はな）てかむおばゝ哉　一茶

㊐『おらが春』初出。

▽『七番日記』文化9・5、中七以下「花で涕かむ娘かな」。『八番日記』文政2・6、中七以下「花にて涕をかむ子かな」。

解　無造作に、白い夕顔の花をむしり取って、クシュンと鼻をかみ捨てる老婆、生活実感を重んじた句風である。

▼　勝峯『評釈』に、「はなに属する語彙で、花は美しいが、鼻汁のはなは汚ない。美と醜の対蹠的な破綻となる場合、一茶は敢て

ありのまゝの写実で、縁語より滑稽味をふくむ表現を行ふ。その前提として『畠打や手涕を拭ふ梅の花』には漫画の趣がある。美醜の語感はない。『蕣の花で鼻かむ乙女哉』で縁語的な調子を持つ。そこをもつと掘下げる。『夕顔の花にて涕をかむ子哉』は蕣を夕顔に、女を子に変化の効はあるが、無邪気な写実を出ない。想を練り、語を案じて、遂に『夕顔の花で涕かむおばゞ哉』に滑稽味を『おばゞ』（婆）でふくめ『花で涕かむ』の縁語をより写実的な大写しとして、美醜の語感を融和させることに成功したのである」。川島『新解』に、「夕顔の花を無造作にむしり取って、はなをかみすてるお婆。まことに野趣満々たる田園の風趣を、即興的に捕えたものと見られるが、実は、一茶は根気よく、この題材と数年に亘って取り組んでいるのである。『夕顔の花で涕かむ娘かな』（文化九年）、『蕣の花で鼻かむ女かな』（同）、『夕顔の花にて涕をかむ子哉』（文政二年）と、朝顔・夕顔及び人物の入れ替えを試みた果てに、一応『おばゞ』と治定したが、後にまた『花娶が青涕をかむ木の葉かな』（文政七年）と脱線ぶりを示している。この句にいや味のないのも、あくのぬけたお婆の一得であろう」。

あつい迚つらで手習した子哉　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、「暑き日に面は手習した子かな」。梅塵本『八番日記』文政2、中七以下「面で手習する子哉」。

解　寺子屋帰りの男の子であろう。墨でよごれた手で顔の汗をぬぐったから、顔中がまつ黒になったのである。童児の寺子屋での行ないだけでなく、帰途の様子もうかがわせる。

▼　黒沢『研究』に、「まづ此の句は『おらが春』の中程にある句だから恐らく信濃での作と見て差支へありません。さうすると彼一茶が柏原中村本陣あたりへ出入してゐるとき、そこの手習子供の様をスケッチしたものと信じられるのです。信濃と雖も暑いときはヂリ〳〵と焼けつくやうに暑いのです。それでも手習子供は一生懸命に墨を磨つたりして専ら手習をしなければならぬ、然し子供だからその間には徒らもします、師匠の目を盗んで墨を塗り合ふ位は当然なことです、さうかうして何時の間にか小さい子は墨で真黒になつて了ひます、陽はだん〳〵暑くなつてゆく、だく〳〵と汗が流れ出して来ます、子供は無邪気でその真黒い手で何気なく汗を拭いた、勿論顔（つら）には斑らに黒く残るのである。この無意識なところを一茶は例の口調であついとてつらで手習した子と直観的に云つたのと考へます。以上の消息をぢつと考へてみなければ一茶のこの句はわからない。あついといふことゝ手習した子とは皆一茶の心の上に自づと連結されて面白く響くのであります。簡単に暑いために墨を塗つて帰つて来たと云ふのでは未だ充分ぢやありません」。勝峯『評釈』に、「寺小屋風景である。万葉や膝栗毛に『つら』と振仮名するが、顔中一杯に拡げての『つら』を

適切に思ふ。墨で汚れた手で、汗を拭きながら、習字をする寺子たちの顔、この顔、揃つて暑さに茹つた証拠ではある。如しとか、やうなとかの推量詞を挾まないで、端的に決定的な叙法が、写実の真と可笑味とを把握してゐる。七番日記の『面で煤はいたやうなるやつら哉』にはさげすみ、罵る、さわがしさが内容となつて、此句の迫真性を摑んでゐない」。川島『新解』に、「習字を教科の第一とした江戸時代の寺小屋風景である。窮屈のシンボルのような師匠の眼がはなれれば、たちまち口論、つつき合い、つかみ合いにもなりかねまじき腕白共が、汗の顔を墨の手でこするので、目ばかり光らせている道化面である。面で手習したような、という俗言を、このように『手習した』と、ズバリと射止めるのが大胆な一茶的手法である」。

大螢ゆらり〳〵と通りけり　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・6。中七「よ(ゆ)らり〳〵と」。

▽『八番日記』文政2・6、中七以下「せかずによ(ゆ)らり〳〵哉」。

解　いかにも大螢、ゆっくりと宙を行くよ、の意。

▼　川島『新釈』に、「『大螢』といふ印象的な上五に対して、重味と嫋(しな)ひを表示する中七の『ゆらり〳〵』は、実によく利いて居る。由来一茶は、俗語の副詞の使用法については独特の妙を得て居る。そして、若しこの座五の『通りけり』を、飛んで行くとか、飛びにけりとかいふ軽い語と置替へて見たら如何だらう。俳句を以て自己の持つ唯一の文芸として精進して来た人でなければ、斯うしたぴつたりとした表現はむつかしいと思ふ」。頴原『名作集』に、「言ひ得て妙と評する外はない。一茶の句は一見真情の赴くまゝ、少しも巧む所がないかの如く見えるが、それは全く皮相の見にすぎない。彼がいかに表現に苦心を重ねて居るかは、多くの遺稿を子細に検べるとすぐ分る事である」「とにかく一茶が非常に表現に意を用ひた人である事は注意せねばならぬ。この大螢の句の如きにも、表現上の苦心は必ずや存したにちがひない」。勝峯『評釈』に、「青白い光りの暈で、からだぐるみ包んで、いつもおど〳〵と怯懦なはずの螢が、悠然として闊歩して行く。闇を掠める大きな光りが、不敵なつら構へも見えて来る。追つたり、摑まへたりするのが不気味のやうな存在となつてくる。ゆらりだけでは蹣跚たるよろけ振りになるが、その下に再びゆらりとたゝみ掛けて、肩をさげ、手を垂れて、恐るゝものゝない横行的な姿の幅を写実してゐる。借りのある家の前を大手を振つて通るやうな、ふて腐れなやくざ者の螢にも見える」。川島『新解』に、「『ゆらり〳〵』と、大幅に弧を描いていく重量感、『通りけり』の悠々迫らぬ調子、いずれも大螢の貫録を示している。『本町をぶらり〳〵と螢哉』（文化十一年）、『本通りゆらり〳〵と螢哉』（同十三年）など、この句も相当の推敲過程を経ているのであるが、『ゆらり〳〵』に落着いたのは、あるいは、一茶と交渉のあった大江丸の『俳懺悔』（寛政二年刊）に『初午やゆらり〳〵と人通り』

という江戸の楼川の句が紹介されてあるのが暗示となったのかも知れない。そして、もちろん螢の方が勝れた句となっている」。

田中川原如意湯ニ昼浴（ゆあ）ミして

なを暑（ほ）し今来た山を寝て見れバ　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、上五「あら暑し」。

注「田中川原如意湯」、田中（湯田中）は横湯川と角間川の合流点。如意湯は、湯田中の温泉旅館主・湯本希杖の川原の別荘の園中にあった。「今来た山」は、箱山峠を指す。『八番日記』には、五月二十二日柏原を立った一茶は、善光寺・長沼・六川を経て二十八日湯田中に入ったことを記す。

解　ああ暑いことだ、今越して来た箱山峠を湯につかりながらあおぎ見ると、峠越えの暑さがよみがえってくる、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「かん〳〵照りの炎天、草いきれの山道で、蹠（あしのうら）まで焦げる苦しみを、この湯をひと浴び、汗ぐるみ落して忘れるつもりで来たのだが、湯雫の垂れる裸で、横向になつて寝て眺めると、今の暑さが再び搾るやうに滲みでてくる。あの峠の地肌の照りかへしの強さ。歩いてゐる時より、却つてよけい暑くなつてくる」。川島『新解』に、「なじみの河原の別荘に入るやいなや、まず園中の湯に入って手足を伸ばしながらも、今越えて来た山を目のあたりに仰ぐと、盛夏の山越しの苦痛が更に蘇って来て、湯に浸っているからだからジーッと汗のふき出してくるような、堪らなさを覚えるのであったろう。『なほ暑し』に実感がにじみ出ている。しかし同時に、『寝て見れば』に、思い出となった暑さの中にホッと息づいている感じがある」。

なむあミだ仏の方より鳴蚊哉　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・6。上五「ナムアミダ」と表記。

注「なむあミだ」は「仏」に掛かる。南無阿弥陀仏（称名・念仏）の意ではない。「仏の方より」は蓮如の『御文章』、「聖人一流」の章の「一心ニ弥陀ニ帰命スレバ、不可思議ノ願力トシテ、仏ノ方ヨリ往生ハ治定セシメタマフ」をふまえる。

解「とんだ茶釜が薬缶とばけた」の地口による「蝶〳〵のふハりととんだ茶釜哉」と同一の趣向である。

▼　勝峯『評釈』に、「仮に一茶の草庵、俳諧寺の間取りにすれば、坊守の菊女は、乳をせびる二つ子のさと女をやつと寝せつけて、坐つて針を持つか厨仕事、念仏は一茶があなた（弥陀）に向つて唱へてゐるのだ。蚊が鳴く。すや〳〵睡るさと女の柔らかな頬、菊女の肉つきのいゝ肌を慕はないで、歯の抜けて白髪の、一茶の疲せ枯れて坐るあたりで鳴く。螫しても、むだな老人の血を吸ふつもりはなからう。察するに此の蚊も後世を願つて、一茶の唱名にあやかりたいのかも知れない。坊守の方へ行つたら、一ト叩き、

往生疑ひなしである」。川島『新解』に、「朝夕の礼拝を怠らぬ敬虔な門徒一茶に向って、仏壇の方からブーンと蚊が鳴き出して来た。コン畜生奴！というのと殆ど同義の『なむあみだ』である。ここで一茶は恐らくピシャリとやったであろう。コン畜生即成仏せよの『なむあみだ』でもある。一茶は後章（注『おらが春』）において『其坐を退けばはや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつゝ』と書いているが、礼拝のその座も去らず殺生を余儀なくされる現世の矛盾に、ほろ苦い皮肉をあびせ、それが又、何とはなきユーモアをただよわしている」。伊藤『一茶集』に、「仏壇に向つて念仏を唱へて居ると、仏壇の奥の方から蚊が鳴いて来る」。中島『一茶集』に、「仏壇を拝んでいるときに、仏像のうす暗いかげから、蚊が鳴きながら飛んできた」。

とべよ蚤同じ事なら蓮の上　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・6。

▽『八番日記』文政2・6、「とぶな蚤それ〳〵そこ〔は〕角田川」。

注「蓮の上」の「蓮」、極楽浄土を象徴する蓮、その葉。

解　ゆびさきで押し潰そうとした蚤が跳んだのである。『七番日記』文化10・9、「あばれ蚤我手にかゝッて成仏せよ」。

▼　勝峯『評釈』に、「これ蚤よ、なまじ人肌などを覘つて、うかつにたかつて見ろ。一トひねり、爪のはさみ打に逢ふだけだ。どうせ、その気ならば、勿体なくも諸仏の御座（おまし）に召される、あの蓮がよいではないか。願つたり叶つたりの往生だぞ。『同じ事なら』はかう解してこそ頷けやう」。川島『新解』に、「蓮の花は浄土のシンボルであり、其処で占める座を蓮のうてなともいう。『我が味の柘榴に這はす虱かな』（鬼子母神が人の子をとって食うのを戒めて釈迦が人間の味のするざくろを与えたという故事にもとづく）の例によると、たとえ土鉢になりとも蓮の生えている方に向って、蚤のついた肌着でもふるいながら、軽く興じたものと思われる」。

かくれ家ハ蠅も小勢でくらしけり　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・6。

注「かくれ家」、一茶の常套語のひとつ。僻み・自嘲の意を込めたわが家、の意。「隠家や遅山桜おそ鰹（文化6）、「隠家に何の来ずともよい螢」（文化8）、「隠家の犬も人数やすゝ祝」（文化11）、「かくれ家や枕元よりことし竹」（文化13）、「かくれ家や手追（食）蛍の走入」（文化14）、「隠家は昼時分さす初日哉」（文化15）、「かくれ家や貰ひ集〔め〕のことし米」（文政4）、「かくれ家に氷柱廻りて這入けり」（文政5）。

解　何もないわが家、蠅までが小勢で暮していることだ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「起居にも外出にもついて廻る蠅を一茶はそんなにうるさく思はなかつたのか、帰庵と題し、『笠の縄我より

先へかけ入ぬ』は文政二年の閏四月の日記に見える」「『蠅も小勢で』住む人並の数なら、ひとつ鍋も厭はない意の『暮しけり』である。こゝは『かくれ家』だから、蠅もかう小勢で蠅の世間を遁けて住むのだと、理屈に渉らない方がよい」。川島『新解』に、「この『かくれ家』も、わびしい小庵くらいの心持。当時の一茶の家庭は、さと女を加えて三人であった。『くらしけり』に、前出、飯の上の蠅におけると同じような、蠅に対する親近感がある。そのためであろうか、『蠅も小勢で』に、ささやかな暮し向き、小ぎれいな感じのあるのもふしぎである」。

ひいき鵜ハ又もから身で浮ミけり　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、座五「浮にけり」。同文政2・4、「手馴鵜の又もから身で浮きにける」「又してもから身で浮は誰が鵜ぞ」。

解　姿や鳴声などが気に入った鵜、それだけが何度もぐっても、獲物をくわえずに浮かび上がってくる、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「鵜匠の荒い手で柔らかく何羽も捌かれる鵜の中で、あの鵜こそ獲ものをきつと呑んで来るぞ。さう目利をして期待した鵜が『から身』で、一尾の鮎も獲らずに潜つた水から浮び出た。見込みちがひであつた。目利をあやまつた。併しどの鵜の獲ものが多いか、鵜飼見の賭けが、行はれたとすれば、今いふ後援者のひいきと見て差間へない。八番日記の『又してもから身で浮は誰が鵜ぞ』の誰かゞ賭けを暗示してゐる。『手馴鵜の又もから身で浮きにける』では、鵜匠その人の力を添へるひいきの意に手馴鵜から考へられもする」。川島『新解』に、「鵜匠の手によって何羽もさばかれている鵜の中に、あれはと目をつけ期待をかけている鵜が、あいにく成績がわるく、又、今度もから身であがって来たというので、鵜飼見物の一場面としてありそうなことであるが、『ひいき鵜は』のはに、自分がひいきするとあいにくとか、意地わるくとかいう主我意識が盛りこまれていて、あくが強い。そこがまた一茶らしいところなのであるが」。

松の蟬どこ迄鳴て昼ニなる　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・6。

注　『的申集』に、「蔓草やどこ迄伸て盆になる」（洞々）。この句『株番』巻の二にも採っている（サガミ洞々）。

解　アブラゼミであろうか。早期から鳴き続けている。野良仕事に出た人たちはすでに昼食をとりに上っている。この蟬はあとどのくらい鳴いたら昼食にするのだろうか、の意。洞々の句が脳裏にあったとは否定しがたい。

▼　勝峯『評釈』に、「松の樹肌に取りついて、朝から蟬が鳴いてゐる。一つところで、いつ迄も静止してゐるかに見える。やゝ暫らくすると、いつの間にか移動してゐる。鳴きながら脚で、すこ

しづゝ上へ這ひあがるらしい。蝸牛のやうな緩ろさで、遅々たる運動であるが、遂に松の頂上にまであの歩みで登るのであらうか。朝から昼までの間に、果してどの辺の高さに攀（よぢのぼ）ることが出来ようか。覚束ない、ゆつくりした速度ではないか。『どこ迄』はどの位の位置までゞ高さをいふ」。川島『新解』に、「喬木の松に鳴きしきっている蟬、それだけに一層圧せられるような堪らなさ！一体どこまで、いつまで鳴いている気だろう。『どこまで鳴いて昼になる』とは巧妙な言いまわしである。午前中から、ジッとしていても汗のふき出すようなやり切れぬ暑さ、けだるさ。そればかりではなく、内面的に持ちあつかっている悩ましさが、現代人の感覚に生々しく訴えてくる」。

今迄ハ罰もあたらず昼寝蚊屋（帳）　（一茶）

注　重　出

はなれ鵜が子のなく舟にもどりけり　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、上五「放鵜の」。真蹟（享和元・六、関之との両吟）に、「鹿の親草吹く風にもどりけり」。『御桜』に、「親鹿は艸吹風にもどりけり」。『希杖本句集』に、「鹿の親篠吹く風にもどりけり」。

解　鵜匠の捌き綱から離れて泳ぎまわっていた鵜、それが舟に残されている稚鵜の鳴き声にひかれるようにもどってきた、の意。鵜でさえ、確かな母子の絆はあるのだと言いたかったのだろう。

▼　勝峯『評釈』に、「鵜匠の捌きを遁れて群から遠くはぐれた鵜である。呼んでも来ない。それが子持鵜であつたので、母鵜を慕つて鳴く子への愛情から、その舟を忘れないで戻つて来た。母性愛など見られない無愛想な顔はしてゐるが、親子の絆はこの鵜にさへ絶ち難いものとなつてゐる。作者はいろ〳〵に云はれる『早乙女や子の泣く方へ植ゑて行く』あの古句の情味は、人の母のみが持つ至上の愛ではない。鵜ですら、この通りな本能的愛がある」。川島『新解』に、これは鵜飼中の鵜ではない。はなれ鵜即ち放ち鵜で、鵜匠の舟から放たれて勝手に漁ることをゆるされている鵜の自由時間である。夜ではない。舟にはまだ早瀬に堪えぬ稚鵜が乗っているのであろう。自由を楽しんでいる一群れの中から、稚鵜の鳴き声に引かれて、恐らく小魚をくわえながらツツーと舟に戻ってくる親鵜！後出早乙女の句の境地をそのまま鵜の世界に移したような、いじらしい生物界の愛のすがたである」。

紙屑もぼたん臭（がほ）ぞよ葉がくれに　一茶

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・4、「鼻紙〔に〕引つゝんでもぼたん哉」。梅塵本『八番日記』文政2、座五「ほたるかな」。

注　『おらが春』第五話（魚淵の牡丹）に添えた結びの一句。

解　葉がくれにくくりつけられた黒と黄（本文）の紙で作った花も、白・紅・紫（本文）の透間もなく咲きそろったその園中で牡丹顔をしているよ、の意。佐藤魚淵（長沼の医家）へのあいさつ。

▼　勝峯『評釈』に、「花の王の豪華な粧ひは、確かに凡百の花を圧して其色を奪ふ。日輪の照るも、群衆の高らかに評するも、敢て意とせず、傲岸に咲き誇つてゐる。支那でも絶品の黄牡丹、人巧の黒牡丹、これぞ園中第一の珍花で感嘆しない者がない。葉の繁みに忍んで、燦光をさける風な王冠の隠遁的な色彩が不審である。一茶はこゝに主人のからくりを覗いて、紙屑を黄に黒に染めた造花であることを発見したが、牡丹の正花的な表情に扮するのも、主人の風流なたくらみと思へば憎めない。よし、人は知らず、その黄と黒の牡丹も、正花と信じて鑑賞する自分「（一茶）である」。川島『新解』に、「独立しては意味をなさぬ句であるが、ぼたん顔と言い、葉がくれと言い、本文をエキスして、その場の雰囲気を彷彿させることに役立っている」。

卯の花もほろり〳〵や墓（ひき）の塚　一茶

㊐『おらが春』初出。

▽『発句鈔追加』、中七「ほろり〳〵と」。

注　『おらが春』第六話（「蛙の野送」）結びの句。

解　墓の死を悼むように、その塚（墓）の上に白い卯の花が「ほろり〳〵」と散っている、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「生埋めの上におんばこの葉を覆ひ、これを墓の塚だと呼んでとむらふ。何んで供養にならう。大きな罪である。酷い、なさけない、悪るさだ。いたづらな人の子だ。塚となる土のほとりで、さつきから惨忍な、いちぶしゞゆうを見届けて、卯の花は一ト零（こぼ）れ、墓殿の最期のいたましさを弔つて、再びほろり、罪な、いたづらな人の子を憤るなみだであつた。それから絶えず、零れ〳〵て卯の花は歎きとくやみに、泣きつくすごとく墓の塚へ散りにちるのであつた」。川島『新解』に、「『卯の花も』であるから、本文を受けて、生き埋めされた墓を悼んで、その塚の上に、卯の花がほろりほろりと涙のようにこぼれかかっている、という童話的構想である。子供らの唄声が遠く去って、掘り返された土の上に卯の花のこぼれている風情は、もの寂しく清楚である。この場合、雪のような卯の花であることが、ぬきさしならぬ調和を保っている」。

ゆうぜん（い）として山を見る蛙哉　一茶

㊐『七番日記』文化10・1。

注　淘淵明「飲酒詩」（『古文真宝前集』など所収）の中の詩句「採二菊東籬下一、悠然見二南山一」をふまえる。

解　遠方を見すえるようにして動かない蛙の姿は、「悠然トシテ南山ヲ見ル」と詠んだ淘淵明先生の姿もかくやと思わせる、の意。中七まで詩仙の姿態を思わせ、座五に「蛙」を置いたところに俳

諧がある。

▼　黒沢『研究』に、「この一句などは何としても信濃の草原と、あの山脈（やまなみ）を知らぬ者にはぴたりとこないに相違ありません。悠然見山といふのは支那の古詩にある句で隠者の心持、気取つた處士の気分であります。ところが、それが一茶の句として考へたときに、さうした概念は跡もなく失くなつて、唯、ある生々しい実感に襲はれるのみで御座います」。頴原『名作集』に、「前肢を突張つて、酒蛙々々然とした面構で山を望んで居る蛙。誠に悠々然たる態度である。陶淵明の詩句を利用したのが単なる技巧に陥らず、閑日月を楽しむ隠士の風丰をも想望されて面白い」。暉峻『鑑賞』に、「陶潜の雑詩『采（ママ）二菊東籬下一、悠然見二南山一』といふ詩句に據ると言はれてをりますが、さういふ出典がなくても、この句は十分に蛙の姿を描き得て妙なるものであります。『悠然として山を見る』までは、詩仙の風貌を思はせておいて、次に突如として蛙を出した滑稽味も賞すべきです」。勝峯『評釈』に、「手を揃へて膝を支へ、白い腹をふくらせて、沈黙する時の蛙の姿には、無想の行（ぎやう）に入つた人の趣がある。ゆふぜんは悠然で、雑念を絶つこゝろ構へが、姿にうつし出されたのである。一茶は、此の悠然の二字を陶淵明の採菊の詩として知らるゝ一篇から取つたのであらう。『菊ヲ東籬ノ下ニ採ツテ、悠然トシテ南山ヲ見ル』の淵明は菊を持つてゐる。芳香を愛しつゝ南山に向つてゐる。一茶の蛙はその菊には無関心である。ひた向きに山を見てゐるのである。悠然たる構へは、淵明と雖これに及ばない。淵明の詩を出典とするにあたらないかも知れないのである。併し淵明の詩は古文真宝前集に載せてあるから、一茶も読んだことがあるであらうし、悠然の二字をこれから取つたと云つても、彼の個性はこの句に於いて傷つけられないのである」。川島『新解』に、「陶淵明の詩句を借りているが、物に動ぜぬ大蛙の姿態をさながらに眼前せしめる」。中島『一茶集』に、「陶淵明の名高い詩句『菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る。』をふまえて、蛙を主語にすえ、擬人化したところにおっとりとしたおかしみがある。あるいは、長年の宿望を達して、ともかくも一家を構え、ほっとしたよろこびを、蛙に託したのかも知れない」。宮本『大鑑』に、「一匹の蛙がちょこんと前肢をついて静かにじっとして動かない。その向こうに山が見える。その落ちつきはらった姿を、有名な陶淵明の詩句（略）によって、擬人化したところに、蛙の姿態を眼前に浮かばせるとともに何ともいえぬユーモアを感じさせる」。

鶯にまかり出たよ引蟾（ひきがへる）　其角

㊐『雑談集』『錦繍緞』『五元集』

解　狂言言葉「罷り出たる者は」を用いて、ひきがえるを登場させ、軽敏・華麗な鶯の声に鈍重で醜いその姿を配した。

思ふことだまつて居るか蟾（ひきがへる）　曲翠

㉞『花摘』。

解　『徒然草』第十九段の「おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざ」をふまえる。

電〔に〕天窓なでけり引がへる　一茶

㉟『八番日記』文政2・7、「稲妻につむりなでけり引蟇」。梅塵本『八番日記』文政2、「稲妻につぶり撫けりひきがへる」。

注　一茶自筆稿本、「電　一雫天窓なでけり引がへる」。文虎本『おらが春』、「電〔に〕天窓なでけり引がへる」。

解　ぴかっと、ひと光りあって、天空はもとの静けさにかえった。少し間をおいて、蟇がいかにもそれに応ずるかのように前肢を動かした。電光一閃の刹那と鈍重な蟇の動きを対比したところに俳諧性がある。

▼　勝峯『評釈』に、「ひとしづくも、いなびかりも、雨の先触れが、既にやって来たことを示唆してゐる。華厳経に『一念、三千世界ノ雨滴ノ数ヲ知ル』菩薩をたゝへてゐる。雨滴はしづくである。蟾は此の経文に交渉はない。ぽつり落ちた雫を払ひに、あたまを一ト撫でしただけである。その一瞬を逸せず、蟾の習性を素描したのである。一茶のうてば響く感性の鋭さを知る可きである」。川島『新解』に、「蟇が、時に前肢を上げて頭を撫でるようなかっこうをする習性を観察して、ここでは、雨か木雫がぽつりと頭に当たった瞬間としようか、電光一閃の刹那としようかと置きまどった訳なので、言いたいのは『天窓なでけり』であったのだ。一茶が本草的知識を示している写生画（一茶叢書第四編口絵）に『謝豹蟲』とあるのは蟇（西陽雑俎等には小なる怪虫と伝えられている）らしく、前肢を頭上にあげている図に『昔耻ヲ抱テ死シタル人ノ醜虫トナル故ニ掘寸時手ニテ面ヲ覆フハ耻ヲ忍ブ歟ト云々』と注してある」。

考　『おらが春』第六話に付してある第五句は、一茶叢書本・古典文学大系本・古典俳文学大系本・一茶全集本などいずれも、

電　一雫天窓なでにけり引がへる

校訂してある。

一茶叢書本（昭5）には読み仮名・漢字ルビはないが、日本古典全集本（昭28）には「天窓」に「あたま」とルビを付し、頭注に「原本上欄に『電』と頭書して『一雫』と両案のあった事を示す」とある。古典文学大系本（昭34）は、「天窓」に「あたま」とルビを付し、頭注に「稿本『一雫』に丸を付け、上に『電』と書いてあるのは、上五を決しかねたのであろう」とする。古典俳文学大系本（昭45）は、「電　一雫天窓なでけり」と校訂、「天窓」に「あたま」とルビを付し、注に「あわてて前肢を撫でる蟇。『稲妻につむりなでけり』（八）」と記す。一茶全集本（昭51）は、前者と同じく丸山一彦氏の校注、この方はルビに変わりはないが、注を付していない。

一茶自筆稿本には、

電（イナツマ）　一雫天窓なでけり引がへる

とあり、西原文虎書写本には、

電〔に〕天窓なでけり引がへる

とある。

一茶自筆稿本では「一」と「雫」両文字の右傍に○印が付されている。このような例は少なくない。いま二三の例をあげる。五丁表の二行めに、

笑ひのゝしりて

とあって、その右傍に「はやし」と書き込まれている。五丁裏三行め、

仏性得たるのになん

には「る」と「の」の字間に○印を書き入れ、その右傍に「も」と書き込んである。六丁表の一行め、

丑刻より始りて八日目〳〵に

には、「て」と「八」の字間に○印を書き入れ、その右傍に「打つゞき」、同じ面の三行め、

いつ〳〵の夜しかときゝしと

には、「夜」と「し」の字間に○印を付し、その右傍に「そんぜうそこに」と書き込んである。

一茶自筆稿本には右のように清書後の訂正・加筆のあとが見えるのだが、「電に天窓なでけり」の句以外は、いずれの校訂者もそれをことごとく認めている。「一雫」の右傍に○印を認めながら、それを推敲の跡と見なかったのは、他の推敲箇所と異り、それが句の上方に書き込まれていたからだろう。また、「電」の右傍に○印のないのも、他の例と異るところだが、これは四丁裏の二行めその例があり、同じ面の五行めのように、

見る。つ。けても

と脱字に気付いていながら、書き込みのないものもある。

この句に関してもうひとつ問題がある。一つは文虎本のように上五「電〔に〕」を採るべきだということのほかに、中七「天窓なでけり」の「天窓」は「あたま」とよむべきか「つむり」とよむべきかということである。「天窓」は、『八番日記』文政二年七月の部に見える「稲妻につむりなでけり引蟇」と表記を異にする同一句であるから「あたま」「おつむ」ではなく「つむり」とよまなければならない。

「電〔に〕」の句が付してある第六話には、合計十四句（一茶十二、他二）が収められている。一茶自身の句のうち、『おらが春』他書に同形・同趣句が見られないのは、「卯の花もほろり〳〵や蟇の塚」の一句のみ、『七番日記』同形が見られるものも「ゆうぜんとして山を見る蛙哉」の一句のみ、そして、『七番日記』の句を推敲してここに採ったものは、「寝並んで夕立雲の目利哉」（文化12・6）の中七以下を「遠夕立の評義（議）哉」とした一句のみである。他の九句について見ると次のとおりである。

『八番日記』と同形（表記上の異同あり）、

稲妻につむりなでけり引蟇（文政2・7）
そんじよそこ爰と青田のひいき哉（文政2・6）
とらが雨など軽じてぬれにけり（文政2・6）

『八番日記』の句を推敲して採用、

閨の蚊のはつ出の声を焼れけり（同文政2・2・5）
閨の蚊のぶんとばかりニ焼れけり（おらが春）
鵜の真似を鵜より功者な子供哉（梅塵本文政2）
鵜の真似ハ鵜より上手な子ども哉（おらが春）
始から釣り放しなる紙帳哉（文政2・6）
留守中も釣り放しなる紙帳かな（おらが春）
山守の爺が祈りし清水かな（文政2・6）
山番の爺が祈りし清水かな（おらが春）
蓮の葉に此世の露のいびつ也（文政2・6）
蓮の葉に此世の露ハ曲りけり（おらが春）
狗に爰迄来いと蛙哉（七番日記文化10・1）
狗の爰へ来よとや蝉の声（文政2・6）
狗に爰へ来よとや蝉の声（おらが春）

右のうち、「鵜の真似を」は風間本では脱落、梅塵本には日記記事が省略されていて、成立の月をただちに知ることはできないが、前後の「一尺の滝も立して夕涼」「叱られて又這入鵜のいぢらしや」は、風間本で六月の部に並記されているから、これは六月の句と断じてさしつかえない。

さて、「電〔に〕」の句は、『七番日記』の文化十一年八月の部にある「稲妻やうつかりひよんとした顔へ」が初案であろう。『八番日記』を見ると、この句の直前には、次の第七話に採る「柿崎やしぶ〳〵鳴の閑古鳥」、第六話「蛙の野送り」に添えるつもりだったと思われる「ヒキどのゝ葬礼はやせほとゝぎす」がある。また、同月の部には、「稲妻や門に寝並ぶ目出度顔」「稲妻にへな〳〵橋を渡りけり」「稲妻や一切づゝに世がなふり」と「稲妻を題材とした句が連記されている。

思うに、「稲妻」を題材に句案を練っていたこの時期、「蛙」（蟇）を題材とした第六話草稿の筆を執り、「ヒキどのゝ葬礼はやせほとゝぎす」とともに「稲妻につむりなでけり」の句も得た。前者については、「卯の花もほろり〳〵や蟇の塚」の別案を得て、これを『おらが春』に収め、後者については、「一雫天窓なでけり」と推敲して『おらが春』に採った。それは草稿成立後、清書の時点まで動かなかった。いったん清書を終えて、全体を読み返す段階に至って、再度上五を「稲妻」（電）に置き替えることにしたのであろう。西原文虎が躊躇なく「電に天窓なでけり」としたのは、そういう事情を知っていてのことだったと思われる。

この句の俳諧性は、稲妻と蟇の対比にある。頭上の小枝の先からぽつりと一雫、しばらくして、蟇がそれに応ずるように前肢を動かしたとする上五「一雫」より、ぴかっと、ひと光りあってから、少し間をおいていかにもそれに反応するように前肢を動かし

たとする方が、より俳諧性は高い。それが一茶自身の判断であったと考える。

そんじよそこ爰と青田のひいき哉　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・6

解　どこそこの田の成育がよい、いやそれよりも、と自身が耕作する青田の出来ぐあいを自慢していることだ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「陰暦の六月は百姓の喜憂する稲の伸び、育ち振りを真青く展開して眺めのよい田となる。畔で仕切り、水の捌き、ゆきゝに使して、一望の眺めながらそれ〴〵に界（さかひ）と区域とがあつて青田の一枚、一枚に出来栄えのよさ、あしさが見られる。そんじよは、それよそれの意で、そこは遠く、こゝは近く、眺める位置からの隔り方である。秋の収穫を予想して、一枚づゝの青田を目利（めきゝ）しつゝ、よいと思ふ方へ荷擔するひいき（援引）である。区画的に青田の良否を見捌く意味のひいきであることを再言する」。川島『新解』に、「あすこの田がよく出来ている、いやあすこよりもここと、青田に向っての批判が、おのずから意見の対立となるものを依怙ひいきするの『ひいき』と言ったのである。ひたむきに議論している農民の顔が見えるようである」「なお、この句は青田の墓と解されぬこともない。『霧に乗目付して居る墓かな』（八番日記）と読ませた例があり、柏原辺では実に『ひいき』ともいうと聞いたことがある。殊に一茶の蛙、其角・曲翠・一茶の墓の次に出ているのである。しかし、陰地を好む墓の性として、青田に点々と面を晒していると見ることも不自然であろうし、八番日記を検すると、この句の次に『起〴〵の欲目引張る』外一句、すなわち青田の句が三句つづいているので、青田を主題とする一般の解釈に従っておく」。

閨の蚊のぶんとばかりニ焼れけり　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・2、5、上五・中七「閨の蚊のはつ出の声を」。

解　ぶうんとばかり、寝室に飛び込んできた蚊だったが、次の瞬間、灯火に突込んでしまったのである。「ぶん」という擬声語を用いて灯火に飛び込んだ蚊を活写しているが、「飛んで火に入る夏の虫」の諺の存在を否定できない。

▼　川島『新釈』に、「『蚊を焼くや褒姒が閨の私語』といふ其角の句から脈を引いて居るやうな気がする。一茶は其角の五元集なども耽読して居た。然しこの句には何等の衒気も構図もなく、蚊を焼くそのことに感覚が集中されて居るために、少しも厭味といふものが感ぜられない。カンテラを手にして腿まで露はにして居る女房を想像して見ても、例へば、その側にいぎたなく鼾をかいている男の姿を想像するとしても、それ以上の何物もない。一句はたゞ、ぶんと鳴く蚊。ハツと動くカンテラの手。否、カンテ

ラを持つ白い手を想像の中に描かしむるだけの余裕さへない。蚊が鳴いた。焼かれた。といふ刹那の現象だけで一句が緊張して居る。いゝ意味から云つても悪い意味から云つても、複雑した傾向を持つ一茶の句の中にあつて、斯うした単純な緊張味のある句は珍しいものである」。勝峯『評釈』に、「この閨は或一人の寝室であつてもいゝが、翠帳裡の空閨、といつてもその中に一人はゐる情景を見れば、待ちに待つて、やゝ焦慮の気分を漂はせるところへ、不運な闖入者の蚊は、ぶんと鳴いた刹那が最期で、やる瀬ない思ひの牲（いきにへ）になつたことに解されて余情がある。八番日記の『閨の蚊の初出の声を焼れけり』は凡景だが、ぶんの羽振り、ばかりの瞬間をとらへて深い情調がある。其角の『蚊を焼くや褒似の閨のさゞめ言』の美人を俤とする内容でもある」。

鵜の真似ハ鵜より上手な子ども哉　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽　梅塵本『八番日記』文政2、上五・中七「鵜の真似を鵜より功者な」。

解　川遊びの子供であろう。鵜のように水もぐりをする子供、それは鵜よりも上手なことだ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「一茶は水に溺れる烏を嘲つて、泳ぎのうまいこどもを褒めて、誰も知ることわざ（諺）を逆手で封じて快としたのである。諺の裏を行く一茶の覘ひどころである。鵜は呑む、然も、のどを縛られてゐる。こどもは掴む、手がはしこい。実際にこどもの方が魚捕りにうまいであらうか。此の句には実より虚、即ち諺が中心となつてゐる」。「〔考〕風雅集の『大井川ゐぜきに来たる山烏うのまねすとも魚はとらじな』の歌、著聞集の文覚上人が清滝川で、猿が烏をとらへ、鵜遣ひにならつて、その鵜を溺れさせた説話など、一茶は読んでゐたことゝ思ふ。一茶の遺稿『隨斎筆紀』に『鵜の真似の烏も有て夕涼作者南山』の句を手録してゐる」。川島『新解』に、「鵜のまねをする烏という俗諺がある。水に溺れるという意味であるが、これは水もぐりの上手な子供たちをほめたのであろう。魚を手つかみでとる、というような理に落ちた解釈は好ましくない。俗諺の意味を離れて、鵜の真似という言葉が、川遊びの子供らのピチピチとした動勢を描き出している」。

寝並んで遠夕立の評義哉㊐　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽　『七番日記』文化12・6、中七以下「夕立雲の目利哉」。

解　手枕で寝ころぶ二、三人の男。遠くの雷鳴を聞きながら、夕立があの山のあたりまで来た、この山のあたりまで来たと語り合っている、の意。

▼　川島『新釈』に、「農家の昼休み時でもあらうか。薄曇りして急に涼しい風が吹出して来た。オヤと思つて気がついて見ると、

遠くの方の空は今夕立がしていると見えて、一団の雨雲が暗澹として垂下つて、幽に稲妻の走るのさへ見えて居る。『あれは何処だんべえなあ、川向ふかナ。』『アーニ、今ツと近かんべえ。南河原だんべえ。』広い座敷にゴロ〳〵と寝そべつて居る男達は、てんでに頬杖をつきながら夕立の評議をやつて居る。言外に見渡しの広さの見えて居ることは面白い。純客観に扱つてあるために（よしや作者がその人物の一人であらうとも）非常に呑気な情趣が出て居る」。勝峯『評釈』に、「手枕で丿〳〵（ヘツフツ）たる転び寝の二三人、話題は、あの夕立が来る、来ないで、その視線は、のしかゝり、のしかゝり、むく〳〵押して来る黒い雲に注がれながら、起きようともしない、漫画的な場面である。七番日記の『寝並んで夕立雲の目利哉』の上五を、『てん〴〵に』とした句もあつて、目利が初案であつたのを、雲をはづして、気分を賑やかに評議と据ゑたのであらう」。川島『新解』に、「足のうらを見せて寝そべりながら、電光のはしる夕立雲のあたりを吟味して『河向うかナ』『いや、もっと近かんべえ』などと話し合っている場面である。他愛ない応答に『評議』というような、しかつめらしい言葉を持出しているところに、例の異質的用語の醸し出すユーモアがある」。

留守中も釣り放しなる紙帳かな　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、上五、中七「始から釣り放しなる」。

▼　勝峯『評釈』に、「笈日記の『春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴、丈草』のやうな寝床をそれなりに、何処かへ出掛ける無性者はあるが、紙帳を釣つたなりの留守は見られない図である。一茶は『明るさよでも明るさよ紙の蚊帳』と、負け惜みをいつてゐるものゝ、一代男の『米櫃も物淋しく、紙帳もやぶれに近き身代』で察しのつく、しがない生活を見せる紙帳、釣りぱなしでは破れやすい紙帳もたゝまず、然も八番日記には、上五を『始めから』とあるやうな無性者は一茶ならではあるまい」。川島『新解』に、「『田の人よ御免候へ昼寝蚊屋』の作者と、昼の紙帳（紙の蚊屋）とは切りはなせぬようである。『おらが春』時代には妻がいたが、草稿や句稿を散らかしておく学者・作家等の習癖を考えると、一茶は留守中も紙帳に手をつけさせなかったかも知れない」。

山番の爺が祈りし清水かな　（一茶）

㊐『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、上五「山守の」。

解　とくとくと下垂り落ちる清水、これは山番の爺が祈りを込めて見つけ出した清水、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「桶で擔ふなり提げるなり、山小屋まで水を運び上げる苦労は、山番が、その手でやもめ針を持つより、厭な辛い仕事である。峠のさえの神へ願を掛け、やつとの思ひで乏し

い水脈を掘りあてた。それが滾々とたまつて此の清水である。いつも一杯くれと立寄る杣や樵夫に、一雫もむだにしてならぬ。犬になんぞ呑ませると罰があたるぞ。と、山番のいつて聞かせる自慢の一トくさりなのである。『祈りし』のつぎに『出したる』の現在か、『と云ふ』の推量かを補へばよい」。川島『新解』に、「『夜着ひとついのり出して旅ね哉』という芭蕉の句があるが、これは水に不自由な山の番小屋の爺が、辛うじて水脈を探りあてたか、あるいは、ようやく見つけ出した清水のしたたりであろう。非常に尊く、清らかな水であることが『祈りし』に暗示されている」。

蓮の葉に此世の露ハ曲りけり　（一茶）

㊢『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、中七以下「此世の露のいびつ也」。『八番日記』文政2・6、「咲花も此世の蓮はまがりけり」。『おらが春』（第七話末）、「蓮の花少曲るもうき世哉」。

解　浄土の象徴たる蓮であるが、末法の世では、その葉の上に置いた露でさえ、いびつであるよ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「葉末に結んで落る露ですら、本性の円さを守つてゐる。それなのに、すこし搖れでもすると、蓮の露は小さく傾いてまがり、ちゞみ損ねていびつにゆがんだりする。露の本性を矯めるのは蓮か。蓮は浄土の花である。仏性を示現して咲くといはれる。その葉がこんな罪をつくるまい。露の本性を歪めるのは此の世にあるからである。此の世にあるものは、罪の負ひめにみな悩まねばならぬ。露のまがるのも負ひめの一つである。此の世への一茶の横睨みである」。伊藤『一茶集』に、「蓮の葉が傾くと露もころげて曲る。浄土の花である蓮でさへ、此世ではそこに置く露が曲つてしまふ。例の一茶のすねた気持」。川島『新解』に、「浄土をシンボルする蓮でも、この世では、その葉におく露が曲っているというので、『直き世や小銭程でも蓮の花』と一応賛美？しながらも、やはりひねって見ずには居られぬ一茶のレンズの曲り方を示している」。中島『一茶集』に、「浄土に咲く蓮の葉におく露でさえ、現世ではゆがんでいる。一茶の世を拗ねた気持」。

狗（ゑんころ）ニ爰へ来よとや蟬の声　（一茶）

㊢『おらが春』初出。

▽『八番日記』文政2・6、上五「狗の」。『七番日記』文化10・1、「狗に爰迄来いと蛙哉」。

解　木漏れ日のもと、仔犬が一頭けたたましい声をたてて跳びまわっている。梢あたりで、アブラ蟬であろう「鬼さんこちら」と言わんばかりに鳴いている、の意。「鬼ごっこ」の掛け声、「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」をふまえる。

▼　勝峯『評釈』に、「狗はいぬころ（仔犬）である。樹の下を吠

え廻るいぬころに、梢の蟬は何ンと鳴く。あんよは上手、こゝまでお出で。人真似にあやして、からかつて、いぬころの口惜しさうな顔を見下ろしながら、鳴きつゞけるかのやうな蟬の態度である。七番日記には「狗に爰迄来いと蛙哉」がある。蛙では構図が嘘になる。蟬であつて、あの無関心に鳴くとばかり見えて、とき〳〵樹から尿をひつかけて飛び去る、いたづらな蟬であつて、お伽の国の動物説話になるのである」。川島『新解』に、「気にし出せばやりきれなくなる蟬の声に対する感情の移入とでも言おうか。実際は、子犬は蟬のかしましさなどには無関心であろうが、ちょうど、ここに来い来いと、高いところから馬鹿にしているようだというのである」。

五月廿八日

とらが雨など軽んじてぬれニけり　（一茶）

㊐『八番日記』文政2・6。

▽『寛政句帳』寛政4、「石と成雲のなりてや虎が雨」。『八番日記』文政2・6、「とし寄の袖としらでや虎が雨」「我庵は虎が涙もぬれにけり」「女郎花つんと立けり虎が雨」。

注　「五月廿八日」、建久四年五月二十八日、曽我兄弟は父の仇・工藤祐経を斬った。この時、討死した兄の十郎祐成の妾大磯の虎（遊女）は、同年六月十八日出家して信濃の善光寺へ赴いた（『吾妻鑑』）という。大磯の虎の悲嘆の涙が雨となり、以降毎年五月二十八日にその雨が降るという俗説は、近松の曽我物などにも見える。『毛吹草』の「四季之詞」に、「曽我兄弟夜討廿八日此時のさた多し」（五月）として、「虎が泪の雨」をあげる。また、『日次記事』は、同日を「虎御前忌」と誤る。一茶も『俳諧寺抄録』に、「十八日大磯の虎、夫三七日出家シテ赴善光寺。十九才」と記している。

解　「虎が雨」、たいしたことはなかろうと雨具も持たずに出かけ、すっかりぬれてしまったことだ、の意。

▼　勝峯『評釈』に、「雨といつても、呪ひほどに零れるばかり、本降りにはならない。虎が雨とはさうしたものと呑み込んで、傘も持たずに出掛けたら、ひどい雨に逢つて、ずぶ濡れになつたと云ふのである。虎が雨をあなどり、軽んずる訳は、刃ハ氷ノ朔日に『虎が涙のしるしが見えて、空が曇つた二十八日、雨三粒でも降らねばおかぬ』とある『雨三粒でも』は、近松が巷談から取つたのであらうから、一茶はその浄瑠璃を知らないにしても、降つても『雨三粒』の話を聞耳に挾んでゐたらう」。川島『新解』に、「はらはら降って来た空を見上げて、ナニ今日は五月二十八日、申訳にふる虎が雨だと、タカをくくって雨具の用意もなく出かけたところ、案外に大ぶりとなって、ずぶぬれとなったというのである。ありそうなはなしである」。中島『一茶集』に、「毎年降る虎御前の涙雨だ、大したことはあるまい、などと見くびって外出したら、ひどい降りにあってずぶぬれになった」。